

12歳 京都府画学校に入学
15歳 内国勧業博覧会で一等受賞
27歳 未婚の母となる
59歳 母を亡くす

vol. 24

上村 松園

Uemura Shouen

生涯をかけ美人画を追求した 女流画家のパイオニア

「あなたはどんな人生に憧れますか？」と問われたら、私は迷わずにこう答える。「一生を懸けて一つのことに打ち込む人生」。子どもの頃に好きなことを見つけ、それを仕事にし、天より与えられし時間のすべてをかけて精進する。たとえば葛飾北斎のように。上村松園もそんな人生をおくった偉人の一人である。

子ども時代から描いていた人物画

美人画で知られる女流画家、上村松園は明治8年(1875年)、多くの人が行き交う京都市四条通で茶葉の販売業を営む家の次女として生まれた。入り婿だった父は松園が生まれる2カ月前に他界していた。2人の幼な子を抱え未亡人となった母に、親戚たちは再婚をもちかけたり、子どもを里子に出すことを勧めたりしたが、母は頑として首を縦に振らなかった。

松園は幼い頃から絵を描くことが好きだった。描くのはもっぱら人物それも女性で、店先に座りこんで、甲斐甲斐しく働く母の姿や訪れる客の姿を観察しては絵筆を走らせた。髪結いが来たときには、母の髪を結うその手元を飽きることなくずっと見ていたという。興味の対象は、身分や年齢によっていろんな種類があった女性の髪形、着物、帯、持ち物にまでおよび、大人顔負けの知識をもつほどだった。そのため、祖父が働く呉服商で花嫁の着付けの手伝いをしたこともあった。

12歳で小学校を卒業すると、日本で最初の画学校である京都府画学校に入学する。その陰には、女手一つで子どもを育てながら、親戚の反対を押し切ってまで進学させてくれた母の姿があった。とは言え、入学から1年半後、恩師の退職を理由に退学している。



1875年、京都市出身。近代日本を代表する女流画家であり、美人画の第一人者。「序の舞」「母子」をはじめ数多くの名画を残している。1948年、73歳のときに女性では初となる文化勲章を受章した。

強い意志とたゆまぬ努力で道を切り拓く

その後は、画学校時代の恩師を含め3人の師匠に弟子入りして修行した。15歳のとき、内国勧業博覧会に出品して一等を受賞する。しかも、作品は来日したイギリス皇太子の目に留まり、買い上げとなった。以来、国内外の展覧会や博覧会で受賞を重ねる。若くして才能が認められたのである。それは周囲からの妬みを買うことにもなった。社会で活躍する女性が珍しかった時代、男性ばかりの中で生きていくことの困難さは容易に想像がつく。それでも松園は自らの進むべき道を信じて邁進する。

優れた作品から構図や描き方を学ぶため、実物を見ながらスケッチブックに縮小して描き写す「縮図」に励んだ。「画家は1日に1枚は必ず写生の筆をとらなくてはいけない」という恩師の教えを実践すべく、展覧会へ行くときは必ず筆記用具を携え、街なかや祭りに出かけては熱心にスケッチした。才能に加え、人一倍、努力家だったのである。

27歳のとき、自らの意志で未婚の母となった。翌年には家業を畳むこととなり、一層、画業に励んだ。弟子を取り始めた。展覧会の審査員も引き受けた。多忙な中でも謡曲を習ったり漢学や漢詩を学んだりして視野を広げ、作品制作に生かした。

58歳で孫が誕生した翌年、愛しい母を亡くす。どんなときも深い愛情で寄り添ってくれた母は、かけがえのない存在だった。逆境の中でも凜として生きる姿は、一人の女性として手本でもあった。独自の表現法を編み出し、74歳で人生の幕を下ろす寸前まで理想の美人画を追求し、描き続けた松園。その作品を観て心を動かされるのは、そこに込められた思いが伝わってくるからだろう。

(執筆/ライター 篠田 りょうこ)